

## B-63 袖丈と袖口寸法の関係およびその決め方

昭和女大短大 ○刑部 昭子  
椎名 米子

1. 袖について実験を重ねるうち、腕が運動により変化することが認められた。このことより種々の運動による上肢の各部位を測定し、袖丈と袖口寸法の関係を求め、これにより被服構成上の決め方を検討した。

2. 基準線を腕を自然に下垂させ、後腋点と前腋点の幅中央A、肘頭と肘窩の半径の中心B、尺骨茎突点と橈骨茎突点の半径の中心CとしてこのA・B・Cを結び腕の中央線とした。前腋点、肘窩、橈骨茎突点を結び内郭線、次に後腋点、肘頭、尺骨茎突点を結び外郭線とした。肘頭と肘窩を結びこの線を基準にして前腕と上腕の各3線上に2cm間隔に標をつけ、この部位の運動時の腕の太さ、伸びの変化を11項目について測定した。

3. 腕の太さは、3分袖の位置で（肘頭上方約10cm）減少約2%増大約7%、5分袖の位置で（肘頭上方約2cm）減少約1%増大約12%、7分袖の位置で（肘頭下方約8~10cm）減少なし増大約6%、長袖の位置で（尺骨茎突点）殆んど変化がない。よって1、袖口幅を決める場合、増大分を考慮に入れ、更にゆるみ分量を加えるべきである。2、従来の3分・5分・7分袖の位置では太さの変化がはげしいので、あまり変化しない他の位置にきめた方がよい。更に3、中央線・内郭線丈の伸びはあまりないが、外郭線丈の伸びの変化ははげしいので丈を決める場合、伸びについても考慮しなければならない。